日韓の未来開く歌声

福岡出身の東亜樹さん(17)

日韓の国境を超えて歌声を響かせる高校2年生の歌手がいる。福岡市博多区生まれの東亜樹(アジュ)さん(17)＝東京在住。幅広いジャンルと約20カ国語の曲を歌いこなす異色の才能を持ち、昨年から韓国で人気の歌番組に出演し、現地では日本を上回る知名度になった。得意の昭和歌謡などを披露する福祉施設での慰問活動は日本で100回を超え、韓国でも始めた。

（平山成美＝釜山、竹次稔）

本番収録を前にリハーサルに臨む東亜樹さん。ファンからの贈り物で首を温めていた ＝2024年12月上旬、韓国・高陽市

邦楽、規制の時代も

歌が好きな両親の影響で、幼い頃からカラオケでマイクを握った。マネジャー役の父、秀頼(ヒデヨリ)さん(71)の仕事で中国・大連を訪れた際、4歳の亜樹さんは「世界歌謡祭」に出場して優勝。ただ、順位を競うテレビ番組などへの出場が増えると、幼き歌い手にも審査員から厳しい声が浴びせられた。5歳にして、ストレスで円形脱毛症が頭の後ろに見つかった。

その困難を乗り越えながら、音楽祭での受賞などを重ね、実力を開花。日本であった日韓交流団体のイベントに出た縁で、12歳の時に韓国で初めてコンサートをした。日韓の名曲を両国の歌手が披露する韓国のテレビ番組「韓日トップテンショー」の関連番組に出演したのは昨年。それを機に、韓国での活動を本格化させている。

テレビ出演 文化の架け橋

慰問活動の中で、高齢者の手を握って回る東亜樹さん＝9日、福岡市中央区のデイサービスセンター「幸せ物語　薬院」

韓国の歌番組は、聴き手に回った出演者たちが、感嘆の声を惜しまずに歌い手を応援する。そんな雰囲気が亜樹さんの肌に合った。「点数を気にしてびくびくすることがなくなった」

韓国文化に詳しい翻訳家でライターの桑畑優香(ユカ)さんによると、韓国では日本の音楽が長く規制され、今もテレビの地上波放送では日本人歌手が日本の音楽を歌う壁は高いという。一方でトップテンショーはCS（通信衛星）の番組で、地上波にできない挑戦をうまく仕掛け、日本の歌を聞きたかった人たちの支持を得ている。「亜樹さんは、アーティストが両国で活躍する新時代を象徴する存在だ」と指摘している。

番組では、日本の演歌や韓国のトロット（日本の歌謡曲や演歌に近いジャンル）などを披露し、歌える曲は約3千にも及ぶ。「映像を通じて、互いの国の歌を知った日韓のファンは少なくない。両国の文化をつなぐ役割を果たしてくれている」。同番組作家の朴秀真(パクスジン)さんは高く評価している。

♪　♬

小さなコンサート会場も、熱気に包まれていた。

韓国での長期滞在を終え、9日に亜樹さんが向かったのは九州の後援会長(82)が通う福岡市中央区のデイサービスセンター。「高校三年生」など昭和の歌謡曲を聞いた通所者の井村タマさん(94)は「みんな知っている曲で感激しました」と涙を流していた。

福祉施設の慰問活動は4歳から無償で続けてきた。「声を聞くと病気が治るの」。そんな声を真に受け、幼き亜樹さんは「あのおばあちゃんを治しに行くんだ」と張り切って施設に向かった。慰問活動は韓国でも10カ所を超え、亜樹さんは「私にとって韓国はもう第二の故郷」という。

秀頼さんは成長を続ける娘に、さらなる夢を託している。「亜樹の歌で、日韓両国の人がさらにつながっていってくれたら、うれしいな」

【西日本新聞meに桑畑さんのインタビュー詳報】